

# 夢の学校

北海道師範塾「教師の道」 監事 近田 勝信

## 夢の学校

小高い丘の上にその高校は建っている。町内には保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校が各1校（園）ある。専門学校や大学はなく、高校はその町の最高学府であり、町の教育や文化そして生活を創り出す大切な教育機関である。勉強のできる子どもできない子ども、地元の子どもはよそに出さないで自前の教育力で賄う。頼まれれば近隣の生徒も預かる。

朝、小高い丘の上からは大きな鐘の音が町中に聞こえてくる。それを合図にしたように、園児も小学生も中学生も高校生も小高い丘に向かって行く。小高い丘にはつづら折りの坂があって、坂の一番下は保育園と幼稚園、その上に小学校、そして中学校、高校がある。子ども達は一人で登校する子は一人もいない。みんな誰かと一緒に、それも必ず年上の誰かが付き添っている。お兄さんやお姉さんと一緒に歩いている子、お母さんの自転車に乗せてもらっている子、お爺さんやお婆さんと手をつないでいる子、中学生と歩いている高校生は先輩ぶって話しながら歩いている。そして、それぞれ園や学校に入って行く。中からは元気のいい挨拶が聞こえてくる。お爺さんとお婆さんは、子ども達を送り終えてもまっすぐ帰らない。丘の坂道の途中から隣の道へ曲がっていった。その先には仲間が集まっていて、もうパークゴルフが始まっていた。

昼、保育園、幼稚園、小学校の給食は、すぐ隣の給食センターで食べる。そこにはパークゴルフを終わったお爺さんやお婆さんも一緒になる。なんと町内で仕事をしているお父さんやお母さんも来ている。配膳もみんなで手分けして、大きな円卓で和やかな食事が始まる。中学生、高校生は少し時間をおいてからの給食、地元でとれたお米でみんなたくましく育つ。この給食センターは道の駅と棟続きで、土日には高校生の調理した料理がレストランメニューとして提供される。

高校の授業は6時間と7時間、生徒の希望でコース選択ができる。どちらの授業も午前中は座学が中心、午後は、6時間コースは実技・実習が主体、7時間コースは科目選択によって座学と実技・実習が入る。同じ科目でも、生徒の実力に応じて到達目標の選択幅があるのでじっくり学習できる。中学校までの基礎学力が身に付いていなかったり、勉強嫌いな生徒でも午前中はがっちり勉強する。午後からは、手職を身に付けて自立して生きていくための実務の勉強をする。正直、机に向かっての勉強は好きでないけど、ゴルフ場のグリーンのことなら任せてください。3.5mmダブルカット、日本一の職人になってみせます。こんな生徒がいる。同じ時間、7時間コースの生徒は座学で難しい勉強をしている。将来、医者や政治家、行政マンとして働いてほしい人に、それに見合った勉強をして町を支えてほしい。勉強ができる人も、できない人も一緒になって一つの学校で学び、お互いを人として尊敬でき協働できる人を育てるのがこの学校の特色である。

放課後は部活動の時間。小高い丘の裏側には、誰もが羨ましがらるスポーツ公園と文化芸術ホールがある。ここは町民の活動の場であると共に、子どもたちや生徒の部活動の場所でもある。だから、小学生が先に練習していて、その後から中学生、高校生が加わる。学校種を越えての部活動、指導する先生方も専門家もいれば素人もいる。学校の会議や出張で部活動に付けないときは、お互いに面倒を見合う。小学生は中学生、高校生をお手本として、中学生、高校生はそれぞれ年下の面倒を見ながら競技力も社会性も育つ。

勉強ができない、勉強がいやだ、非行事故を起こした、高校に行っても何にもならない、

いろいろな理由で何人も中退していった。教師としての力のなさを感じた。しかし、高校で生きるすべを見つけ巣立っていった生徒も何人も見てきた。おらが町でおらが子供を育てる。

こんなことを夢見て校長になった。今、我が道を振り返ってみたい。

## 序

平成4年4月、高校教師として3校目の勤務となった。新卒で離島に9年、本土に戻って夜間定時制7年、教師生活16年目に入る。離島では、担任4年間、生徒指導部長2年間などをはじめ、学級・学年経営、分掌業務、部活動指導そして地元の人との付き合いなど教員生活のイロハを経験した。定時制では、隣の学校が1学級減の影響で一挙に34人の1年担任となった。経済苦、低学力、近隣校退学やり直し組、そして不登校の生徒たちであった。家庭環境も様々で、世の中の歪みを凝縮したように見えた。目の前の生徒には真正面から向き合っていたつもりでも、心の中には全日制の教員が羨ましい気持ちもあった。

そして、ようやく念願の全日制高校への異動である。しかし、体育教師としてのあこがれとはほど遠い現実が待っていた。

追分町（現在は合併して安平町追分）、人口約6千人、基幹産業は農業、それに室蘭本線と夕張線が交差する交通の要衝として栄えた町である。しかし、炭鉱閉山により石炭輸送はなくなり、室蘭からの石油輸送もトラックに代わり、さらに国鉄民営化に伴い町は衰退していく。町内には小学校、中学校、高校が各1校である。中学校の卒業生の内3分の1は苫小牧市へ出ていく。管内屈指の進学校、工業高校、部活動の盛んな私学などに流れる。学力的にも経済的にも恵まれた層の生徒たちである。

当時の追分高校は、1、2年生普通科3間口、3年生普通科3、家政科1間口で、2次募集ではほぼ定員が埋まる生徒数だった。入学者は、地元追分町と早来町から3割弱、他は苫小牧市から7割、千歳市が若干名である。地元の生徒は大人しく穏やかな気風であまり手はかからないが、苫小牧から来る生徒はいわゆる落ち武者意識で、低学力、生徒指導で余され組、不登校など何らかの問題を抱えた生徒達だった。千歳から来る生徒もほぼ同様に、JRで2駅20分の通学であった。

学校は荒れていた。当時は全道でも生徒指導困難校といわれる学校がいくつかあり、追分高校もその5本の指に入っていた。まずは、見かけが良くない。男子はパーマ、リーゼント、短ランにボンたん。女子は短い上着、長いスカート、化粧、赤いヒールの生徒もいる。昭和50年代に見かけた光景が今でも残っているのかと思う程だった。通学列車の中はタバコの煙だらけ、駅のトイレもタバコだらけ、駅の売店で買ったカップラーメンの器は汁が入ったまま捨てられる、柄が悪く喧騒とした雰囲気一般のお客さんは目をしかめて遠ざかる。通学路でも平気で車道に広がり、ごみを散らかして歩く。このような風体だから、町民からは当然非難の目で見られる。

学校の中はどうだったか。授業中は、廊下に出歩くことはなく教室には入っている。何も無いときは平穩に授業が進められていく。しかし、教科書を忘れた、課題を提出しないなどの注意や指導で時間を費やし、気が乗らないと先生の話の聞かない、しゃべりだすなどなど、授業が上手くいかない学校でよく見かける光景になる。真面目な生徒は迷惑そうな顔をしているが、ことが治まるのをじっと待っている。面と向かって注意できる生徒はほんの僅かである。このような中でも、授業を成立させられる先生がいる。反面、同じクラスに行っても全くと言っていいほど授業が成立しない先生もいる。何故なのか、これに

ついて次の機会に触れたい。

授業がこのような状態であるから、全校集会もまた然りである。始まるまでに時間がかかる、話を聞いていない、姿勢がだらしない、先生方は集会の間中、列の中へ入って指導する。毎月1回頭髪服装指導がある。全校集会の隊形のまま学年ごとに一人一人見ていく。直さなければならない生徒にはそれぞれ支持が出る。納得しないものは、なんとか自分の意を通そうとごねる。先生方も妥協しないから、ひと悶着がだんだんエスカレートして怒鳴り合いになることもある。そして翌日からは再点検が何日も延々と続く。

昼休みになると、一目散に売店をめぐって走ってくる。驚いたことに、昼休み一時帰宅を許可していた。家庭の都合で弁当やパンを買うお金も持たせられない生徒には、昼休みの時間だけ帰宅が許されていた。これが生徒の都合のいいように利用されて、関係のない生徒がついて行って誰の目もはばからずタバコを一服してくる。流石に翌年からは取りやめとした。

学校のトイレはタバコの煙がもんもんである。先生方は毎休み時間ごと巡回するが、ちょっとでも出遅れるとその間隙をついてくる。先生方が煙のあるところに行っても、生徒は知らぬ存ぜぬの一点張りである。

放課後になると一斉に生徒が帰っていく。苫小牧行の列車は16時、17時、その次20時を過ぎる。ほとんどの生徒が帰宅部である。部活動に加入しているのは、地元追分町と早来町の何人かである。私が受け持った女子バレー部も練習が週3日、あとはアルバイトがあるから部活動はなし。当然、このことを当たり前と思っている生徒と古典的体育教師の溝は埋まらなく、ほどなく休部状態となる。

生徒の非行事故も途切れることなく、放課後は毎日職員会議、停学の申し渡しと解除、それに家庭訪問に追われ、補習も講習もできない、部活動にもつけない日々が続いた。

まあ何ともひどいことかと思いつつも、生徒指導で苦勞した島の後半戦と定時制を足して、時間と場所を移せばこのようにもなるかとの思いでじっくり見ていた。

そして1年、大きな転機が来た。(つづく)